観音霊場としての青岸渡寺と紀三井寺の立地・地形に関する考察

小　野　健　吉

要　　旨

西国三十三所観音霊場巡礼の札所には山地・崖地に立地する寺院が多く、これは経典等に描写される補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージで立地が選ばれたためと考えられる。本稿では、経典等に描写された観音菩薩居所の立地・地形等を整理した上で、青岸渡寺と紀三井寺の立地・地形等をこれと対照し、両寺が経典等のイメージにかなう場所を選び造営された可能性を示す。あわせて、西国三十三所に人を誘う魅力として、その立地・地形に由来する眺望を位置づける。

第１章　はじめに

１．観音信仰

まず、観音菩薩とその信仰の日本での展開について、速水（2000）の解説を参考に、以下に要約しておきたい。

観音菩薩は、サンスクリット原語では「アヴァローキテーシュバラ（Avalokiteshvara）」、すなわち「観察することに自在な」という意味を持つ。鳩摩羅什（350～409 頃）の旧訳で「世の衆生の救いを求める声を聞いて救いを与える」という意味の「観世音菩薩」（以下、「観音菩薩」）と名付けられ、玄奘（602～664）による新訳ではサンスクリット原語に即した「観自在菩薩」とされた。観音信仰は、インドから中央アジアを経て中国に入り、さらに朝鮮半島を経て日本に伝わる。飛鳥時代の日本への伝来当初は追善的信仰であったものが、奈良時代には国家鎮護ならびに現世利益的観音信仰へと変化し、平安時代になると来世救済的観音信仰も大きな比重を占めるようになる。平安時代後期には、山岳修行を積んだ修験的仏教者（聖）が居を構える山や寺院が貴族などの参詣・参籠の対象となるとともに、聖が各地の霊山・霊場を巡る廻国修行も活発になる。こうした文脈の中で、西国三十三所観音霊場巡礼が成立するのである。

２．西国三十三所観音霊場巡礼

西国三十三所観音霊場巡礼は、観音菩薩を祀った近畿地方各府県および岐阜県の 33 カ所の寺院または堂宇を巡る巡礼である。この巡礼は、長谷寺を開いた徳道上人によって養老 2 年（718）に始められたとする伝承を持つが、前述のとおり、実際に巡礼が成立するのは平安時代後期と考えられ、当初は園城寺の僧の廻国修行であったものが次第に民衆に受け入れられ、中世以降現在に至るまで多くの信仰者を巡礼へといざなってきた（清水、2008）。三十三所の寺院または堂宇は札所と呼ばれ、和歌山・大阪・奈良・京都・滋賀・兵庫・岐阜の七つの府県に所在し、それらを結ぶ巡礼路の延長は 1,000km 以上に及ぶ。それぞれの寺院は古い歴史を持つことから、文化財に指定されている建造物・仏像等も数多い。2019 年には、「1300 年続く日本の終活の旅～西国三十三所観音巡礼～」として文化庁の文化財活用事業である「日本遺産」にも認定されている。

３．先行研究と本研究の目的

観音信仰や西国三十三所に関する研究は多数あるが、とくに補陀洛山・補陀洛山信仰に的を絞った先行研究としては、多面的かつ多数の論考を収めた神野（2010）の『補陀洛信仰の研究』がある。また、清水（2008）は、西国三十三所札所の成立や信仰の拡大と補陀洛山との関係、現実の札所景観やそれを表した絵画が三十三所の聖地イメージの形成に寄与した可能性を指摘している。

本稿では、神野（2010）の成果を念頭に置きつつ、観音菩薩の居所あるいは降臨場とされる補陀洛山について、『華厳経』および『大唐西域記』における記述を整理する。そのうえで、和歌山県に所在する一番札所の青岸渡寺（和歌山県那智勝浦町）と二番札所の金剛宝寺護国院（紀三井寺：和歌山市）の立地・地形等と

眺望の現地調査結果を検討し、この２寺が補陀洛山にある観音菩薩の居所のイメージに基づいて立地が選ばれ、伽藍が造営された可能性を示したい。

第２章　経典等に描写された補陀洛山と観音菩薩の居所

１．補陀洛山

神野（2010、pp.15-28）は、『華厳経』の「補怛洛迦山」の記述から補陀洛山を「南方海上にあって海と山の要素を豊かにもち、慈悲行によって衆生の救済・教化を実践する菩薩の住む清浄な山」と総括する。あわせて、『大唐西域記』の「布呾洛迦山」の記述からは補陀洛山が海上ではなく海岸にある山と読み取れることを挙げ、補陀洛山は一所に固定されない複数のイメージが重層していることを指摘している。

本章では、あらためて『華厳経』『大唐西域記』における補陀洛山の描写を確認し、その立地・地形を整理する。佐久間（2015、pp.23-28）によれば、補陀洛山の描写が現れる『華厳経』「入法界品」は、200 年頃までに成立したと推測される『華厳経』の最古層部分で、補陀洛山を観音霊場とする信仰の最古の典拠の一つとされる。そのストーリーは、善財童子が 53 人の善知識（仏道の師となる善き友）を訪ねて教えを請うというもので、観音菩薩（観自在菩薩）はそのうちでも極めて重要な善知識である。その居所たる補陀洛山についての記述は、『華厳経』（六十巻本・八十巻本）[1]に見られる。また、玄奘三蔵が漢訳した密教経典である『不空羂索神呪心経』にも『華厳経』に類似した描写が見られる。さらに、『大唐西域記』（646 年成立）では、巻十・十七「秣羅矩吒国」の項に、実在するかのような具体的な「布呾落迦山」についての記述がある。以下に、『華厳経』と『大唐西域記』の当該部分を示す。

２．『華厳経』（六十巻本）「入法界品」

『華厳経』（六十巻本）「入法界品」（巻第五十一）で「光明山」所在とされる観音菩薩の居所に関連する記述は、以下のとおりである（SAT 大蔵経テキストデータベース研究会、2018）。

爾時善財童子。正念思惟彼長者教。隨順菩薩解脱之藏。正念菩薩諸憶念力。次第分別一切諸佛及諸佛法。一心正念諸佛法流。憶念受持彼諸佛法。及佛莊嚴長養菩提。思惟正念一切諸佛不思議業。漸漸遊行至光明山。登彼山上周遍推求。見觀世音菩薩住山西阿。處處皆有流泉浴池。林木欝茂地草柔軟。結跏趺坐金剛寶座。無量菩薩恭敬圍遶。而爲演説大慈悲經。普攝衆生。

「光明山」（二重下線：筆者）はサンスクリット語の「ポータラカ」の意訳。観音菩薩が住むのは、その光明山の西山腹の窪地であり、そこにはいたるところに泉や流水あるいは水浴できる池があるとともに、樹木が生い茂り、柔らかい草が生い茂っていると描写されている（下線：筆者）。

３．『華厳経』（八十巻本）「入法界品」

『華厳経』（八十巻本）「入法界品」（巻第六十八）では、善財童子が訪ねた「補怛洛迦」山（二重下線：筆者）と観音菩薩の居所について以下のように記す（SAT 大蔵経テキストデータベース研究会、2018）。

於此南方。有山。名補怛洛迦。彼有菩薩。名觀自在。汝詣彼問。菩薩云何。學菩薩行。修菩薩道。即説頌曰

海上有山多聖賢　衆寶所成極清淨
華果樹林皆遍滿　泉流池沼悉具足
勇猛丈夫觀自在　爲利衆生住此山
汝應往問諸功德　彼當示汝大方便

時善財童子。頂禮其足。遶無量匝已。慇懃瞻 仰。辭退而去爾時善財童子。一心思惟彼居士教。入彼菩薩解脱之藏。得彼菩薩能隨念力。憶彼諸佛出現次第。念彼諸佛相續次第。持彼諸佛名號次第。觀彼諸佛所説妙法。知彼諸佛具足莊嚴。見彼諸佛成正等覺。了彼諸佛不思議業。漸次遊行。至於彼山。處處求覓此大菩薩。見其西面巖谷之中。泉流縈映。樹林蓊欝。香草柔軟。右旋布地。觀自在菩薩。於金剛寶石上。結跏趺坐。無量菩薩。皆坐寶石。恭敬 圍遶。而爲宣説大慈悲法。令其攝受一切衆生。

「補怛洛迦」（二重下線：筆者）は、サンスクリット語の「ポータラカ」の音訳。すなわち、一般に通用する「補陀洛山」もこの音訳に基づくものである。頌では、観自在菩薩が住するのは海上に屹立する山であり、そこは極めて清浄で、花や果実をつけた樹木の林があ

り、泉や流れならびに池沼を備えた地であると記す（下線：筆者）。本文では、観自在菩薩の居所について、山の西面の巌の多い谷と特定したうえで、泉があって水流が廻り、樹木が生い茂り、香り高く柔らかい草がなびいていると、頌を補う（波下線：筆者）。

４．『大唐西域記』巻十

『大唐西域記』巻十・十七「秣羅矩吒国」は、布呾洛迦山（補陀洛山）と観音菩薩の居所について、以下のように記す（京都大学人文科学研究所　西域行記データベース）。

秣剌耶山東。有布呾洛迦山。山徑危險。巖谷攲傾。山頂有池。其水澄鏡。流出大河。周流繞山二十匝。入南海。池側有石天宮。觀自在菩薩往來遊舍。其有願見菩薩者。不顧身命。厲水登山。忘其艱險。能達之者。蓋亦寡矣。而山下居人。祈心請見。或作自在天形。或爲塗灰外道。慰喩其人。果遂其願。

「布呾洛迦」（二重下線：筆者）は、サンスクリット語の「ポータラカ」の音訳。この山が「秣剌耶山」の東にあるとした上で、山道は危険で、巌の多い谷は険しいと記し、以下のように詳述する。その山頂には鏡のように澄み切った池があり、そこから流れ出る水は大河となり、山を 20 周廻って南海に注ぐ。観自在菩薩が往来したときに滞在する石の宮殿は、池の畔にある。そして、観自在菩薩に会おうとする者は、身命を顧みず激流を渡り、山を登ることになるが、その艱難を越えてそこに達する者は極めて少ない（下線：筆者）。

５．補陀洛山と観音菩薩居所の立地と構成要素

上記の補陀洛山と観音菩薩居所の立地や構成要素を取りまとめたのが表１である。すなわち、『華厳経』によれば、補陀洛山は南方に立地し、海上に屹立する山であって、観音菩薩の居所となるのは、その西山腹の窪地または巌谷である。そこには泉・流水・池沼など豊かな水があり、その水を基盤に果樹・花樹が林をなし、地上は柔らかい香草に覆われていると記される。一方、『大唐西域記』では、南インドの「秣羅矩吒国」の海から遠くないところにある山で、峻険なその山に登るのはたいへん困難であるが、山頂には清澄な池があり、池から流れ出した水は大河となり山を 20 周廻って海まで下っており、観音菩薩の居所となるのは、山頂の池の畔にある石の宮殿であると記される。

		『華厳経』（六十巻本）「入法界品」	『華厳経』（八十巻本）「入法界品」	『大唐西域記』巻十「秣羅矩吒国」
補陀洛山の位置（呼称）		南の方角にある山（光明山）	南の方角の海上に屹立する山（補怛洛迦山）	南インド秣羅矩吒国の秣剌耶山の東にある山（布呾洛迦山）
観音菩薩居所の立地・地形		補陀洛山*の西山腹の窪地	補陀洛山*の西山腹の巌谷	補陀洛山*頂の池の畔の石の宮殿
補陀洛山*構成要素	地形	泉	泉	―
		流水	流水	池を水源とする大河
		池沼	池沼	山頂にある清澄な池
	植物	樹林	果樹林・花樹林	―
		柔らかい草	柔らかい香草	―

＊経典等ごとに呼称は異なるが、観音の居所たる同一の山を指すので、本表ではすべて一般的呼称である「補陀洛山」としておく。

表１　経典等に見る補陀洛山・観音菩薩居所の立地と構成地形・植生

第３章　青岸渡寺と金剛宝寺護国院（紀三井寺）

１．青岸渡寺とその立地・地形

青岸渡寺の歴史等について、永島（1987）ならびに『和歌山県の地名』(1983) を引きながら、その歴史等の概要を把握しておきたい。青岸渡寺は、那智大滝の南南東方、大滝を一望する高台に位置する。縁起によれば、仁徳天皇の時代に裸形上人が如意輪観音像を祀ったのが始まりとされるが、如意輪観音を本尊とする如意輪堂の文献上の初見が『中右記』天仁二年 (1109) 十月二七日条であることから、現在地に堂宇を構えたのは平安時代中・後期の事と見られる。このころから

写真１　青岸渡寺如意輪堂

観音信仰が高まって西国三十三所観音霊場巡礼が形成され、『寺門高僧記』覚忠伝の三十三所巡礼記（1161）では、青岸渡寺如意輪堂が第一番となっている。青岸渡寺は、その後幾度か焼亡を繰り返し、現在の如意輪堂（写真 1）は、織田信長による兵火で全山焼失した後に、豊臣秀吉が天正 18 年（1590）に大旦那となって再建されたものである。

次に、青岸渡寺如意輪堂の立地・地形に注目すると、標高 749.5mの妙法山の北東の山腹、標高約 250mの一帯に造成された平坦地に熊野那智大社と並び建ち、境内からは那智山原始林と原始林から流れ落ちる那智大滝が北北西方向に一望できる（図 1・写真 2）。一方で、境内には目立った湧泉や池沼は見られない。また、急峻な山腹を造成した平坦地に立地することから、如意輪堂に至る参道の最後の部分は長い階段となっている（写真 3）。

青岸渡寺如意輪堂のこうした立地・地形を前章で整理した『華厳経』や『大唐西域記』における補陀洛山での観音菩薩居所の立地・地形等と対照してみよう。妙法山の北北東山腹に営まれた青岸渡寺如意輪堂は、『華厳経』で補陀洛山西山腹の窪地あるいは巌谷とされる観音菩薩居所と、方位は違うものの、立地・地形は類似する。また、『華厳経』に記される泉・流水・池沼、『大唐西域記』に記される山頂の池やそこから流れ出て山を廻る大河といった構成要素は見られないものの、顕著な水流である那智の大滝を遠望する点で水との関係性は深い。さらに、一帯の豊かな照葉樹林には、『華厳経』に記される植物相との類似性も読み取れる。これらを総合すると、青岸渡寺如意輪堂は、『華厳経』に記される補陀洛山の観音菩薩居所を色濃くイメージさせるものであることがわかる。

2．金剛宝寺護国院（紀三井寺）とその立地等

金剛宝寺護国院（以下、「紀三井寺」）の歴史等について、薗田（1984）ならびに『和歌山県の地名』（1983）を引きながら、その概要を把握しておきたい。紀三井寺は、景勝地の和歌浦を一望する名草山の山腹に位置する。寺伝によれば、宝亀元年（770）に唐の僧である為光上人がこの地にいたって千手観音を感得して一宇を開き、自ら刻んだ十一面観音とともに本尊としたという。この十一面観音は十世紀を下らない古風な作風を示すことから、開創年代はその頃とも推定できる。文献では、『寺門高僧記』行尊伝の三十三所巡礼記（1093-94）に第五番札所として等身十一面を本尊とする金剛宝寺の名があり、同じく覚忠伝の三十三所巡礼記（1161）には第二番札所としてその名があることから、平安時代後期には顕著な観音霊場として成立していたことがわかる。その後、室町時代になると熊野

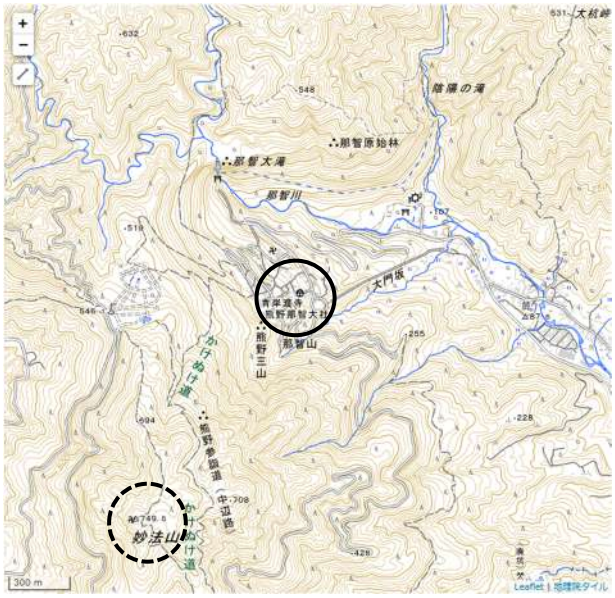

図１　青岸渡寺の立地（地図ナビ https://www.map-navi.com/town/30421.html）

写真２　青岸渡寺から那智原始林・那智の大滝

写真３　如意輪堂に至る階段

参詣や観音巡礼の隆盛に伴い多くの参詣者を集めた。嘉吉元年（1441）に、兵火または風害により堂舎は壊滅的な打撃を被るが、その後、漸次復興される。本堂の観音堂については、復興後にも幾度かの修理を経た後、宝暦９年（1759）に紀州藩主・徳川家の助力で再建されたのが現在のものである。

次に、紀三井寺の立地・地形に注目すると、標高228.7mの名草山の西の山腹、標高 50m前後の場所に造成された平坦地に本堂や鐘楼などの建つ伽藍が展開する（図２・写真４)。海岸線からほど近い山麓に建つ楼門を潜り232段の階段からなる参道を上ったところに開けるこの境内地は、万葉集にも詠われた景勝地の和歌浦を西方に見下ろす眺望絶佳の立地である（写真５)。さらに、参道脇に清浄水（写真６)、そのすぐ南に楊柳水、さらに北方やや離れたところには吉祥水という三箇所の湧水が見られる。

紀三井寺のこうした立地・地形を前章で整理した『華厳経』や『大唐西域記』における補陀洛山での観音菩薩居所の立地・地形等と対照してみよう。名草山の西山腹に営まれた紀三井寺は、『華厳経』で補陀洛山西山腹の窪地あるいは巌谷とされる観音菩薩居所と、方位・立地・地形が類似する。また、海岸近くに位置する山という点では、『大唐西域記』の記述とも符合する。さらに、『華厳経』や『大唐西域記』に記される水の要素のうち、泉（湧水）が存在することも補陀洛山のイメージと共通する。加えて、一帯の豊かな照葉樹林には、『華厳経』に記される植物相との類似性も読み取れる。これらを総合すると、紀三井寺は、『華厳経』や『大唐西域記』に記される補陀洛山の観音菩薩居所を、前述の青岸渡寺以上に色濃くイメージさせるものであることがわかる。

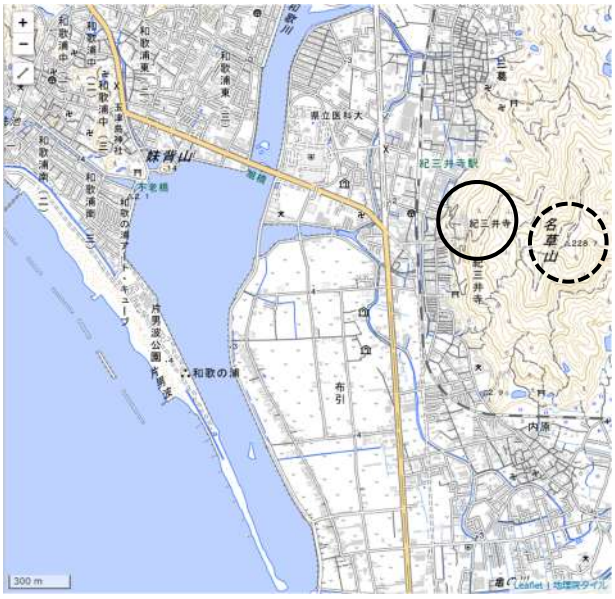

図２　紀三井寺の立地（地図ナビ https://www.map-navi.com/town/30201.html）

写真５　紀三井寺から和歌浦方面を望む

写真４　紀三井寺境内

写真６　清浄水

第４章　結論

本稿では、『華厳経』および『大唐西域記』における補陀洛山と観音菩薩の居所に関する記述を整理し、西国三十三所観音霊場巡礼第一番札所である青岸渡寺と第二番札所である紀三井寺の歴史ならびに立地・地形等について現地確認を含めた調査を行い、両寺の立地・地形等が補陀洛山の観音菩薩居所のイメージを色濃く投影していることを明らかにした。換言すれば、両寺とも『華厳経』に記される観音菩薩居所のイメージに適う場所を選んで堂舎を造営した可能性が高いことが推論されるわけである。さらに、峻険な補陀洛山の山腹の窪地という『華厳経』に記された観音菩薩居所の立地・地形は、そもそも眺望に優れていることが想定され、このイメージに適う場所に造営された両寺においても、青岸渡寺では那智山原始林と那智の大滝、紀三井寺では和歌浦という優れた眺望景観が際立っている。

西国三十三所観音霊場巡礼は、「1300 年続く日本終活の旅～西国三十三所観音巡礼～」として 2019 年に文化庁の文化財活用事業である「日本遺産」に認定されている。そして、そのポータルサイトのストーリーでは、「人生を通して、いかに充実した心の生活を送れるかを考えることが、日本人にとっての究極の終活である。」「観音を巡り日本人本来の豊かな心で生きるきっかけとなる旅、それが西国三十三所観音巡礼なのだ。」といった紹介がなされている。心を豊かにする旅、信仰の旅としての巡礼の本来的な意味は記された通りであると思うが、青岸渡寺・紀三井寺について本稿で明らかにしたように、補陀洛山の観音菩薩居所の立地・地形のイメージを投影したがゆえに得られた素晴らしい眺望景観もまた、この旅の大きな魅力の一つである。西国三十三所観音霊場巡礼の札所すべてにこのことが当てはまる訳ではないにせよ、大津市の第十四番札所・三井寺（園城寺観音堂）、京都市の第十六番札所・清水寺をはじめ、多くの札所において人々を魅了する眺望景観が魅力であることは確かである。ストーリーの中でも青岸渡寺を例に挙げて景観の素晴らしさについて触れてはいるが、文化財活用事業としての「日本遺産」においては、眺望景観の素晴らしさを強調して発信することが、訪日外国人観光者を含むより広い層に訴えかける上でも重要かつ有効であると考える。

【　注　】

(1) 華厳経の漢訳には、５世紀に成立した『大方廣佛華嚴經』六十巻（六十華厳）と７世紀に成立した『大方廣佛華嚴經』八十巻（八十華厳）がある。

【引用・参考文献】

神野富一（2010）『補陀洛信仰の研究』山喜房佛書林

佐久間留理子（2015）『観音菩薩』春秋社

清水健（2008）「西国三十三所―観音霊場の祈りと美―」『西国三十三所 観音霊場の祈りと美 展覧会図録』pp.214-227　奈良国立博物館

下中邦彦編（1983）『和歌山県の地名』pp.382-384, 710-711　平凡社

薗田香融（1984）「紀三井寺」『国史大事典 4』pp.209-210　吉川弘文館

永島福太郎（1987）「青岸渡寺」『国史大事典 8』pp.201-202　吉川弘文館

速水侑（2000）「観音信仰のあゆみ」『観音信仰事典』pp.44-73　戎光祥出版

【引用・参考ウェブサイト】

京都大学人文科学研究所　西域行記データベース：
kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~saiiki/　2024 年 1 月 27 日最終閲覧

日本遺産ポータルサイト　1300 年続く終活の旅～西国三十三所観音巡礼～：
https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story074/　2024 年 1 月 27 日最終閲覧

SAT 大蔵経テキストデータベース研究会（2018）SAT 大蔵経テキストデータベース：
https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php　2024 年 1 月 27 日最終閲閲覧